

菅原浩志

××× 卷頭言「多様性の時代に…」

××× モンゴルという国から考える

国際社会の平和と安定(第4回) 清水武則

××× そばのススメ～好きなこと、得意なこと、

人のためになること～(第3回) 吉田悦花

××× 持続可能な社会の担い手となる子どもを育てるために 広中忠昭

××× 第59回道徳教育研究会の報告 柏会場・新潟会場

××× 子どもたち一人ひとりに追い風を送るための 「これから求められる学校教育」とは 長澤勇哉

××× 学校のちょっといい話② 鍵山智子

××× 編集後記

けいいく

知徳一体の啓発教育をめざして



多様性の時代に…

映画監督

菅原 浩志

日本で育った娘がアメリカの公立小学
校に入学した。白人、黒人、ヒスパニッ
ク系の中、初めてのアジア人。英語が全
く理解できない娘のために授業に立ち会
う機会があった。先生の問い合わせに対して積
極的に答える子、消極的な子。児童の数
ほど態度も答えもいろいろ。突拍子もない
答えが出ても、先生は「それは素晴らしい
考え方ね」「良い答え、グッドジョブ」
と先ず受け止め、認める。

その後、東京で電車に乗っていた時のこと。外の景色を見たい幼い子が窓に向
かって座ろうとしている、母親が「○
ちゃん、誰もそんな座り方してないで
しょ、駄目よ」とたしなめていた。個性
を伸ばすアメリカの教育、協調性を重ん
じる日本の教育。地球の表と裏ほど距離
が離れているが、その違いに驚愕した。
今、私はアイヌを

ムイのうた』の撮影中。アイヌを取り材した中にこんなエピソードがあった。北海道の小学校での授業。先生が児童に訊いた。「氷が解けたら何になる?」多くの児童が「水」と答えるなか、アイヌの子が答えた。「春になる」。日本語を話さないアイヌの子どもたちを集め、和人の文化や習慣を基にした教科書で教育した時代があつた。和人同化政策だが、アイヌの子どもたちは理解することが出来ず、その結果、アイヌは劣つていると判断された。

異文化でありながら、和人の枠にはめようとする教育。人と違うことは認められず、皆が同じになる画一的教育。これらは落ちこぼれを出さないようにする一方、子どもの個性や才能を見出し、子どものことを考えての指導なのだろうか。

二〇二三年秋に完成する『カムイのうた』の中で、アイヌの娘が囲炉裏の側で水を溢すシーンがある。そこに居た叔母が、「床の神様、喉乾いてたんだわ」と伝える。過ちを叱るのではなく、受け入れる。個々の子どもに接する大人は度量の大きさが求められる。多様性が認められる時代だからこそ、子どもの個性が伸ばせる環境と懐の深い指導者が求めら

題材にした映画『カ

映画への熱い思いを語る筆者